

変化する富樫像:
謡曲「安宅」と歌舞伎「勧進帳」を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47774

変化する富樫像

—謡曲「安宅」と歌舞伎「勧進帳」を中心に—

桶田 幸知香

はじめに

謡曲「安宅」は、遅くとも寛正六（一四六五）年以前の成立である。歌舞伎「勧進帳」は謡曲「安宅」をもとに七代市川団十郎が作り、天保十一（一八四〇）年に上演された。後に、九代市川団十郎の手によって現行の形に完成された。

両作品に登場する敵役の富樫については、一般的には「弁慶の忠心に感じて通してやった情けの人」とされているが、「安宅」や「勧進帳」の本文からそのようなことは読み取ることができないように思われた。そこで、本稿では、「安宅」から「勧進帳」に至るまでに、富樫がどのように解釈されてきたのかということができる限り明らかにし、その上で、「安宅」と「勧進帳」の本文から読み取れることを中心に富樫を考察することによって、最終的に富樫像の文学的価値を自分なりに見出すことを目的とする。

一. 作品の解釈・評価

「安宅」は、「義経記」を素材にしたとされている¹⁾。そして「勧進帳」は「安宅」を軸にして作られた。「勧進帳」が完成するまでの間にどのような解釈や評価が存在したのか。以下ではわずかだが見つけることができたものを年代順に示す²⁾。

【謡抄】³⁾

平家物語二ハ、トガシハアリ。関守ノ沙汰ハナシ。

【盛長私記】⁴⁾

富樫介モ勧進帳ニアラサル事ヲハ慥ニ是ヲ知ケレトモ命危ク思ヒケレハ勧進帳ニ緯寄テ異義無関所ヲ通シケリ

【謡曲拾葉抄】⁵⁾

異本義経記云加賀國富樫介家直が關所下略大系圖云富樫介家直ニ

郎家經子也云々（中略）盛長私記云加州住人富樫介は（中略）鎌倉殿の御家人に列しけれ共未本領安堵には及ばず僅に懸命の地を賜て加州に居住す鎌倉殿より別て仰は蒙らざれ共今度豫州を搦捕は忠賞として本領安堵相違有べからじとて一族郎等も皆此義に同意して安宅の邊に新關を構へけり文略

『役者有難』江戸の巻

〔御旗勸進帳〕で富樫を演じた五代目市川団十郎について

次にとがし左衛門にてよしつねをみるとがむる時 弁慶が忠心をかんにわざと関を通し（略）

『北国奇談巡杖記』

富樫の某、頼朝の命に随ひ、同国の安宅浦に新関を建て、毎日山伏を止めけるに、武蔵坊弁慶が忠謀の厚きことを感じ、富樫が情にて落しぬ。（中略）さてしばし下りて、春日の宮の伏おがみ過給ふに。富樫酒肴を携へきたりて、（中略）護者のため、かゝる御身をしのばせたまふことの、いたはしさよと、懇にもてなしける。

『謡言粗志』

富樫介モ勸進帳ニアラサル事ハ慥ニ知ケレトモ命危ク思テ勸進帳ニ事ヨセテ無義ニ関所ヲ通シケリ

『謡抄』は簡潔であるが、江戸時代以降は細かな解説がついているものも多い。

『謡言粗志』では、富樫の出自についても詳しく記述があり、富樫家の家直の舍弟家泰が「安宅」における富樫であると述べている。更に、富樫が義経一行を通した後、頼朝により官位を除かれた富樫は、出家して諸国を行脚し、奥州で義経と再会するとの記述もある。

また、『盛長私記』と『謡言粗志』によれば、富樫は勸進帳が本物ではないことを知りながら命の危険を感じて義経一行を通してやったということになっている。島津久基氏は『盛長私記』について、後人の偽作と述べているが、これも当時の受容のされ方の一つとして捉えたい。また、他の『役者有難』や、『北国奇談巡杖記』も「安宅」や「勸進帳」に言及したものではないが、この二つが成立した時期には既に「弁慶の忠義を慮って通してやる富樫」という考え方が存在していたということが分かる。

二. 「安宅」関連作品に見る富樫

「勸進帳」成立以前にも安宅伝説を描いた所謂（安宅物）は存在する。「安宅」が成立し、「勸進帳」が作られるまでに富樫がどのように描かれていったのか。本節では中世や近世の（安宅物）の作品を順に示し、富樫の変遷を追ってみることとする。最初に中世の作品から見ていきたい。本節では、「義経記」、幸若舞「富樫」、義経北国落絵巻^①を順に紹介する。

まずは「安宅」の素材になったと言われる「義経記」を挙げる。「義経記」での「富樫介」は「隠れなき分限の者」であり、館をかまえて、頼朝からの命令はないがひそかに義経を待ち受けている。館に乗り

込んでいくのは弁慶一人であり、富樫は弁慶の勧めに従って寄進をしている。この富樫の館の場面では勧進帳読み上げも義経打擲の場面もない。「義経記」での関所は越前国の井上左衛門が主を務める三の口の関である。この関を義経一行は井上左衛門が留守の時に通りかかり、その後の道中ですれ違った井上左衛門は、義経であると気付いていながら哀れに思って一行を通して。島津氏は、「勧進帳」の「富樫左衛門」という名は、この井上左衛門から取ったものではないかと述べている。そして、義経打擲の場面は、如意の渡りでの出来事である。「安宅」は「義経記」のこれらの場面を凝縮して作られたものであると考えられる。

次に挙げるのは幸若舞の「富樫」である。この作品でも、弁慶が一人で富樫のもとへ乗り込んでいく。富樫は土豪であり、頼朝の命令により城をかまえて義経を待ち受けている。詮議を受け、東大寺の勧進聖だと答えた弁慶は、勧進帳を見せろと言われ、往來の巻物を勧進帳として読み上げて作品は終了する。

「義経北国落絵巻」での「富樫の介」は頼朝からの命令で「御所に関を据え」義経一行を待っている。そこに弁慶一人が乗り込み、勧進を勧めるが、富樫は疑う。山伏を討てば罰が当たると弁慶が脅すと、富樫は勧進帳を見せろと言う。弁慶が往來の巻物を取り出し読み上げると、富樫は本物の山伏であるとして通している。

中世のこの三作品を見ると、富樫は加賀国の豪族で、館や城（時にはその中に関）をかまえていること、そして、わりと簡単に一行（＝弁慶）を通してることが分かる。名前も「富樫介」となっていることが多く、描かれる状況も似通ったものが多いので、中世の富

樫のイメージは加賀国豪族というもので統一されていたのではないかと考えられる。

続いて近世の〈安宅物〉をその成立年代順に見ていく。今回見ることができたものは以下の通りである。

「義経東下り物語」

「凱陣八島」

浄瑠璃

「療静胎内裙」

浄瑠璃

「義経風流鑑」

浮世草子

「花実義経記」

浮世草子

「清和源氏十五段」

義太夫浄瑠璃

「風流東海硯」

浮世草子

「御撰勧進帳」

江戸歌舞伎

「通増安宅関」

黄表紙

今回は、安宅関や富樫に関する記述の部分だけを中心に取り上げることにする。

「義経東下り物語」は、北国落ちの内容や、富樫の館での記述などが「義経記」に酷似している。「義経東下り物語」に出てくる「とかしのすけ」は、「たうこくにきこへたる大みやう」であり、「かまくら殿よりさしておほせこうむらん共、ないくようしんして、判官殿まち奉る」という。本文がほぼ「義経記」と同じであるため、「義経東下り物語」の富樫の描かれ方は中世における富樫の人物像そのままである。

「凱陣八島」での安宅関を守る「富樫の左衛門」は、弁慶に、頼朝が主君ならば義経も主筋であり、哀憐を垂れるべきと言われ、弁慶

の勸進帳読み上げを聞くと、「此上は假へ判官武蔵にもせよ。許し申すにはや／＼通り給へ」と言っている。

「殯静胎内拵」の「地頭富樫の左衛門家直」は関を設け、絵図に合う山伏は首を斬っている。弁慶を助けようとする義経と、涙ながらに義経を踏み倒す弁慶を見た富樫は、「御痛はしさ肝に染み」本物を探す邪魔だとして通してやった上、次の関所の手形も渡してやり、弁慶に縄をかけたことに懺悔の涙を流す。

「義経風流鑑」の「富樫の左衛門」は梶原の讒言に気付いており、弁慶もそのことを察する。富樫は「気毒なる顔して」、東大寺建立の奉加をすすめていると見えるので、勸進帳を読めと提案をしている。弁慶が小遣帳を出して読んだのを富樫は「わざと殊勝顔に」もてなし、弁慶たちは富樫に助けられた形になっている。

「花実義経記」の「富樫の左衛門」は「平家追討の節我幕下に属し」ていたと義経が語っており、富樫と義経一行は顔見知りとなっている。富樫は義経寵愛の静を差し出すか、大切な家臣を差し出すか選択を迫り、家臣を軽んじていないかどうか試す。結果として義経は静を手放したため、そのことに感じ入り、すぐに静を返し、路金まで渡している。

「清和源氏十五段」では、「富樫左衛門光長」にかかるという娘がいる。弁慶は、義経との祝言を条件に、義経を慕うか利用して関を通ろうとする。富樫はかかるよを諫め、頼朝の兄弟である義経を捕えることも、頼朝の命に背くこともできないと言い、自ら腹を切る。かるよに一行の邪魔にならないよう祝言を破棄させ、後の甲斐を託して息絶える。

「風流東海硯」の「とがしの左衛門」は静御前の父時忠に取りたてられ、義経にも一度救ってもらった恩があった。そのため、義経を助けたいと考えているが、鎌倉には人質として主人先富樫介の子がいるため、義経の臣下の首を鎌倉に送らなければならないと義経の臣下忠信に告げ、忠信はそれを受け入れ自害する。富樫は後から来た義経一行を、本物を探す邪魔だとして通している。

「御撰勸進帳」での「富樫の左衛門家直」は、安宅関で相役斎藤次柘家と昼夜交替で関守を務めており、義経一行を情けで通す。その際に義経一行を通す心を堀河百首の和歌に託して伝える。

「通増安宅関」では関守「富樫の某」の配下に塚見占之丞という人間がおり、弁慶は塚見に賄賂を渡す。富樫は全てを察した様子で義経一行を深く詮議するそぶりも見せない。弁慶は勸進帳を得意げに読み上げ関を通過する。ここでの富樫は、賄賂に応じた役人として、滑稽に描かれている。

近世以降、富樫は「情けの人」や、「義経一行と気付いていた」という解釈で語られる作品が多い。更に、富樫に様々な設定が付け加えられており、大きく焦点が当てられている。その結果として、弁慶の機智や活躍が全く活かされない展開のものも存在している。このように、時には弁慶を凌ぐほど富樫は安宅関における重要人物として考えられていたことが〈安宅物〉の変遷から分かるのである。

三. 安宅関について

ここからは実際に「安宅」と「勸進帳」それぞれの本文における

描写を比較してその変化を追っていききたい。最初に、舞台となる安宅関について考える。安宅関の存在は、富樫という人物を考える上では決して省くことのできない重要な要素である。安宅関は富樫の拠点であり、物語は主に関所でのやりとりを中心に展開される。(「安宅物」での安宅関の描かれ方は様々である。「義経記」では、「富樫が館」とあって、関は存在しない。幸若舞の「富樫」では、富樫の城の様子は、「表の櫓十三所、脇の櫓九所、二重三重に高櫓を上げさせ」ている。「義経東下り物語」では「とかしかたち」となっている。「義経北国落絵巻」では、富樫の拠点は城(その中に関所)である。「凱陣八島」では、「安宅の關」とされており、その様子は「俄に堀ほり堀をかけ。兵具ひつしと建並べ。備へ厳しき其景色。」である。「癡静胎内拵」では、「安宅の関二重の矢切二重の櫓。貫の木海老錠しつと、下し」ている様が描かれている。「花実義経記」では、富樫は「大勢兼て催し要害に関をすへ」ていると書かれている。「清和源氏十五段」では、「五百騎のぐんせい三百騎のかせい武士」が「ねずの番」をしている。「風流東海硯」では、「二重の矢切三重の高堀。貫の木ゑび錠しつと、おろし。往来をきびしく吟味」する様相が描かれている。「御撰勸進帳」では、大道具で江戸時代の関が実際に再現されたようである。「盛長私記」では、関の様子は「木戸逆茂木ヲ構へ數百人ノ番兵ヲ指置」くとされている。

これら(「安宅物」)の安宅関の様相から最初に注目したいのは、富樫の拠点は関所ではない場合があるということである。先に挙げたもので、富樫の拠点が関であるものとならないものに分けると以下の通りになる。

「義経記」・「富樫」・「義経東下り物語」・「義経北国落絵巻」

——城・館が拠点

「安宅」・「凱陣八島」・「癡静胎内拵」

「花実義経記」・「清和源氏十五段」・「風流東海硯」

「御撰勸進帳」・「盛長私記」・「勸進帳」

——関所が拠点

これを見ると、富樫の拠点が城や館になっている作品は成立年代が中世や近世初期であり、(「安宅物」)の中でも比較的早く成立しているものばかりである。反対に、拠点が関所になっている作品は近世成立のものがほとんどであり、「安宅関」が富樫との対決の場になったのはおそらく「安宅」が最初ではないかと推測される。

近世の関所の機能は「軍事目的による通行人改め、領内住民取締りのための通行人改め、出入物資改めの三つ」であると水島茂氏は述べている。関所破りは大罪でもあったため、江戸時代に成立した(「安宅物」)(特に、上演という形で発表されているもの)の舞台が関所で定着した背景には、このような関所の警察的なイメージがあり、観客が想像しやすいということもあったのではないか。実際、「御撰勸進帳」では江戸の関所をイメージした作り物が舞台上に設置されており、当時の常識が反映されていることが見て取れる。

一方、中世の「安宅」関連作品が富樫の拠点を城や館に設定している中、「安宅」だけが富樫の拠点を関所にしたのは何故なのであるか。そして、富樫が「関守」にされたのは何故なのか。このこと

については、義経の北国落ちが難題譚であるということが大きいのではないかと考える。城や館は関所ではないので、全員が無理に越える必要はなく、多少の荒事を働いても相手との立場は対等であるため、そこを出てしまえばさほど問題にもならない。実際に中世の作品は全て弁慶一人が乗り込む形となっている。弁慶一人を印象付けるには良いが、それでは義経一行の難題譚にはならない。そこで、全員で、(しかも相手は時の権力勢であり、捕まれば終わりであるため)なるべく事を荒立てずに通過する必要がある関所は義経の北国落ち難題譚を表現するには絶好の場所である。そして、富樫は義経一行を捕えることに積極的である。素材の「義経記」でも、頼朝の命がなくともひそかに義経を捕まえるつもりであり、富樫は意欲的な人物として描かれている。対して、もともと関守という役割であった井上左衛門は、最初から「情けの人」であった。しかし、最初から義経一行に同情的な人間よりも、捕えることに意欲的な人物の守る関を如何にして通るかという方が、難題譚として面白味が見出せる。それが、富樫が「関守」として選ばれた理由の一つとして考えられるのではないだろうか。

次に、関所の人間について考えたい。「安宅」と「勸進帳」の登場人物には、義経一行に対する関側の人間として番卒(「安宅」では下人)が存在する。「安宅」では、登場するのはアドアイのつとめる下人一人だけであり、義経一行が十二人いるのに対し、関側は二人だけである。一方「勸進帳」では太刀持一人に加え、番卒が三人登場し、義経一行が六人であるのに対し、関側は五人となっている。本来なら安宅関には大勢の人間がいてもおかしくはないところを下人一人

や番卒三人のように少なくされたのは、舞台化する際に敵側に大勢の人がいては主要人物が目立たなくなるという理由があると考えられるが、何故「安宅」と「勸進帳」では関側の人数が違うのか。一つには義経一行と関側の数をほぼ同じにそろえることで、数という物理的な力が拮抗している様を表す効果があるということが挙げられるのではないかと思われる。そしてもう一つの理由としては、「勸進帳」では富樫の果たす役割が大きくなっているため、その結果として関側の人間にも焦点が当たったということが挙げられるのではないかと考える。実際、「勸進帳」では「安宅」に比べて番卒の台詞が多くなっている。以下は「勸進帳」だけにある番卒の台詞である。

番卒甲「い、や、昨日も山伏を、三人まで斬つたる上は」

番卒乙「たとへ誠の山伏たりとも、容赦はならぬ」

番卒丙「たつて通らば、一命にも」

三人「及ぶべし」

これは、「たとえ本物の山伏であっても通さない」という、山伏の詮議に積極的な富樫の人物像を関所側の視点から表現しているのではないかと考えた。

最後に、以上を踏まえた関全体の様相について考察したい。「勸進帳」では富樫の名乗り直後の問答で番卒たちに山伏の首を掛け並べていることを語らせている。「安宅」では、山伏の首を掛けてある関の様相を第四段と第五段においてオモアイに語らせている。関の様相を誰が語っているかということは重要な問題である。(安宅物)で

は、大抵のものは地の文で済まされている。「安宅」では義経一行側の人間であるオモアイが遠目から関を見たという体で語ることによって、安宅関の恐ろしい雰囲気伝える効果があると考えられる。一方、「勧進帳」では関側の人間である番卒が「仰せのごとく」と言っているように、富樫の命令であることを示したうえで関の様相を語ることによって、山伏を捕えることへの富樫の意向を関所側の視点で明確に表し、手強い敵としての富樫というイメージを冒頭から印象付ける効果があると考えられる。

四、関所通過の場面における変更された富樫の台詞

「安宅」と「勧進帳」の間の富樫の変化の中で、義経一行を通す際の台詞の変更は最も重要な変化と言つて良いだろう。以下はその台詞である。

ワキ 近頃誤り申して候ふはややおん通り候へ

〔安宅〕

富樫「早まり給ふな、番卒どものよしなき僻目より、判官どのにもなき人を、疑へばこそ、斯く折檻も仕給ふなれ。今は疑ひ晴れ申した。とく／＼誘ひ通られよ」

〔勧進帳〕

「安宅」の富樫が「誤り申し」たとだけしか言わないのに対し、「勧進帳」の富樫は義経扮する強力が「判官どのにもなき人」であると断言し、「疑ひ晴れ」たと言いつている。ここに「安宅」よりも踏み込んだ

解釈がうかがえる。既に述べたように、「安宅」の富樫の台詞からでは富樫が何故関を通したのかはつきりしない。そのためか近世の〈安宅物〉では、富樫が関を通す理由に様々なものがある。関を通す場面に際して富樫の事情や背景が描かれることが多いように見受けられ、富樫が関を通した理由に富樫の為人を見出そうとしているように思われる。島津氏は富樫が関を通す場面について、

（中略）辨慶の表情に感動して疑念全く晴れたと明言し、通行を許して退場するが、能では誤解の無禮を詫びて疾く／＼と關を越えさせるだけである。この點歌舞伎は確に所謂御芝居をしてゐる。同時に富樫を敵役にする事から救つて、これにも花を持たせるのである。

と述べている。これまでの先行研究もこの変化に注目したものが多く、島居フミ子氏や飯塚恵理人氏が「安宅」と「勧進帳」の富樫の変化に触れている。島居氏は近世の作品において勧進帳劇が形成されていく中で、

富樫の情愛は、さらに拡大されて新しい登場人物による判官への情愛をも描くようになり、富樫は、弁慶をはじめとする多くの人々から判官によせられる献身的な熱情に感動して義経主従を許すという筋が展開していくことになる。

と述べている。また、「勧進帳」について、「底に流れる精神は江戸時代を通じて培われてきた勧進帳劇の精神であつた」としている。

飯塚氏は富樫の変化について

江戸時代には《安宅》の注釈に、富樫は義経一行と気付きながら怖れて見逃したという巷説を取り入れた解釈が見られるようになった。さらに「御撰勸進帳」では「見逃した」というのを一歩進めて、富樫は義経を怖れてではなく、弁慶の気持ちを察し同情して通したと解釈するようになった。

と述べている。

しかし本当に富樫は弁慶の気持ちを汲んで関を通したという解釈で良いのだろうか。「安宅」では富樫が関を通す時の台詞は「近頃誤り申して候ふ」だけであり、「勸進帳」も「安宅」より踏み込んでいるとはいえ、実際の台詞は上述のもののみであり、わずかこれだけの台詞から判断するのは早計ではないだろうか。「勸進帳」はあくまで「安宅」に沿って作られたものであり、「一番重視すべきなのは両作品の本文である」と考える。本節では両作品の本文から読み取れることのみを用いてこの関所通過の場面を考察したい。

本文を比べてみると、「勸進帳」では「方々は何ゆゑに」から始まる唄の後に「安宅」にはない問答が挿入されている。弁慶が富樫に向かつてまだ疑いがあるならばこの強力を打ち殺そうと言い、富樫がそれを止めに入っている。この問答が挿入されたことにより、富樫が打たれる強力（義経）を気に掛けるような印象を与えられると考える。関を通れと促す台詞も「はやはやおん通り候へ」から「とく／＼誘ひ通られよ」に変わり、早く通れと促すだけだった富樫が、

早く（その強力を）伴い通れと促しており、明らかに強力を意識していると思われる。しかしここから富樫が弁慶の気持ちを汲み取っていたかどうかまでは読み取れない。この場面から富樫の気遣いを読み取ることにはできるが、弁慶の気持ちを汲み取ったということについては本文の拡大解釈になってしまう。この拡大解釈の背景にあったものこそ、近世の《安宅物》の流れから富樫の変化を読み取ろうとする動きであったのではないかと考える。また、現在の「勸進帳」の富樫は舞台から引込む際に涙をこらえるような演技をするそうであるが、この現行の演出は五代目尾上菊五郎が確立させたといわれる⁽¹⁵⁾。この演技が受け継がれていき、そうした演技の上での解釈も、今日の「情けの人」富樫のイメージを浸透させる一因であったのではないかと考える。

五. 本文全体から見る富樫像の変化

前節では、関所を通す際の変更された富樫の台詞に注目したが、本節では本文における富樫を最初から順に見ていく。謡曲の第二段にあたる部分から既に富樫に明確な変化が見られる。以下はその引用である。

ワキ　いかにたれかある　アドアイ　おん前に候　ワキ　けふも山伏のおん通りあらばこなたへ申し候へ　アドアイ　畏り候

（「安宅」）

富樫「いしくも各々申されたり、猶も山伏来りなば、謀計を以て虜となし、鎌倉殿の御心安んじ申すべし。方々、きつと番頭仕れ」三人「畏まつて候」

（「勸進帳」）

「勸進帳」の富樫は、関を通りかかった山伏について「謀計を以て虜となし、鎌倉殿の御心安んじ申すべし」と考えており、「安宅」の「山伏を留め申し候、今日も堅く申し付けばや」という考えよりも山伏を捕えることに積極的である。富樫のその姿勢は、義経一行が関を通りかかってからも変わらず、何とかして捕まえてやろうという意図が見える。それが「疑ひ」という言葉である。一つ目は弁慶が勸進帳を読み上げた後の「勸進帳聴聞の上は、疑ひはあるべからず。」である。この後に山伏問答があり、その後に二つ目の「かゝる尊き客僧を、暫しも疑ひ申せしは眼あつて無きが如き我が不念」という言葉がある。これらを読むと富樫の、義経一行への「疑ひ」がそれぞれの場面で少しずつ変化しているように思われる。勸進帳読み上げの後ではまだ疑いを残しているため山伏問答に入り、その問答も弁慶が完璧に答えてみせたために、ようやく疑いを晴らそうとする。しかし、義経を見答めて最後の「疑ひ」の場面へと入っていく。この「疑ひ」という言葉は、弁慶と富樫の対決の知的要素をより深めるものであると考える。「安宅」では、力で押している部分も残っているように見受けられるが、「勸進帳」では、富樫の「疑ひ」によつて山伏問答へとつながり、弁慶は必然的に富樫の「疑ひ」を何とか知性で以て晴らして切り抜かなければならなくなっている。富樫が「疑ひ」という言葉を口にしなければ、力を見せて富樫を無理やり納

得させて通つても劇の筋としては成立する。しかし、「疑ひ」という言葉を観客に聞かせてしまった以上、どうにかして弁慶はその「疑ひ」を晴らさなければ劇の筋として成り立たなくなってしまう。その意味で、この富樫の「疑ひ」という言葉は弁慶の智恵を試すものであり、「勸進帳」が力だけの物語ではなく、弁慶や富樫の思惑が絡み合った物語であることを示すものでもあると考える。

次に、酒宴の場面について考えたい。義経一行を富樫が追つてきて、関での非礼を詫げる。そこから酒宴、そして弁慶の延年の舞の場面に入る。この場面の富樫については、「安宅」と「勸進帳」ではほとんど違いがない。しかし、この場面は、関所通過の場面につながる非常に重要な場面である。関所を通した後、富樫が疑いの心を残しているかどうかによつて、この酒宴の場面の持つ緊張感の度合いが変わってくる。また、心を許すなどという弁慶の台詞があること、そして富樫が関を通した理由が本文からでははっきりしないこと、これらを受けて酒宴の場面は緊張感が抜けない締まった場面になっているのである。

六. 富樫が本文の中で果たす役割

本節では富樫が「安宅」や「勸進帳」の物語の中でどのような役割を果たしているのかという点について考えたい。本文から読み取れるものだけを読むと、「安宅」の富樫と「勸進帳」の富樫にそれほど大きな違いがあるわけではないことが分かる。共通した台詞はほとんど同じであり、関を通した理由もはっきりしない。しかし、「安

宅」と「勸進帳」の中で富樫が果たす役割はそれぞれで異なってくる。

「安宅」では、富樫はワキである。名のあるワキではあるが、「某」と具体的な名前は曖昧にされており、あくまでも物語の進行役に過ぎないワキという役によく合っている。「安宅」での富樫は弁慶に積極的に働きかけて物語を進行させている。しかし、物語の進行以上の余計なことはしていないのも「安宅」の富樫の、そして能楽という芸能の特徴とも言えるであろう。そうであるからこそ、ワキ富樫の台詞は必要最低限にまで抑えられ、そこに富樫の意図を読み取ることが困難になっているのである。しかし、富樫の意図を無理に解釈する必要はない。「安宅」の富樫に求められている役割は物語を進行させ、シテを引き立てる働きであるからである。実際、「安宅」の中での富樫の行動は全てシテに向けられている。シテである弁慶と問答をし、勸進帳を読めと言ひ、酒をふるまい、舞を求める、これらの行為は全てシテにつながるものである。「安宅」の富樫はシテを引き立てる行為以外の無駄なことは一切していない。関の様相を語るのオモアイであるし、義経を見咎めたり、義経一行との面会の交渉をしたりするのはアドアイである。高桑氏が「対等なように見えても富樫は弁慶の演技の引き出し役」であると述べているように、「安宅」の富樫はシテである弁慶の演技を引き出す役割を担っていると言える。

「勸進帳」では、富樫は見せ場を持った役として登場する。冒頭で義経一行を捕えることに積極的な姿勢を見せ、勸進帳読み上げに続き山伏問答をしかけ、手強さを示しておきながら、打撃される強力を氣遣いつつ関を通してやるという、手荒いだけではないことを示

す一面もある。「勸進帳」では、富樫に限らず義経にも見せ場があり、「安宅」のように、弁慶だけに見せ場を集中させているわけではない。その結果として、富樫について様々な解釈を観客にさせることが可能になっていると考える。しかし、「安宅」より台詞も見せ場も増えているとはいえず、本文から「弁慶の忠心を感じて通した」というような解釈をすることはできない。この解釈については後述するが、「勸進帳」の富樫は、このような拡大解釈を生むほどの効果を持っているのだと考えられる。

七. 変化する富樫像

安宅伝説の地元小松市では、「弁慶の智略と勇氣、富樫の仁義をたえ、昭和15年に二人の銅像が建てられた。」とあるように、富樫を「仁義」の人であるとしている。本節では、前節で触れた富樫の「弁慶の忠心を感じて通した」という解釈を含め、こうした「仁義の人」「情けの人」という富樫像が作られたことの文学的価値を考える。島津氏は、富樫像について以下のように述べている。

若し富樫が判官と知つて之を免したとなれば、弁慶が絞り出した知囊の効果はかなり消極的とならざるを得ない。關守を欺いて主君を救つた機智と苦計とは、そのみを以てしては成功しなかつたこととなる。同時にその代りには又、元來好意を有する、若しくは全然好意を有せぬ——さうならば一層——對手たる富樫の胸奥に、感激の心を揺り動かさせた血涙の忠誠は、一段武士道的光輝を放つて、辨

慶の資格を單なる智力の勝利者から道義の勝利者へと高めて行つたこととなるのである。

「富樫が氣付いていたかどうか」によって、弁慶の活躍の持つ意味が大きく異なってくるというように島津氏は考えている。富樫像が、義経一行だと氣付いていてわざと通した「情けの人」に変化していることは既に述べた。この解釈は多くの作品と時代の変遷を経てきているため、多大な影響力を持つ。それは「勸進帳」にも影響を与え、完全に富樫には「情けの人」のイメージが定着している。富樫に強固なイメージが形成されたせい、か、「安宅」の富樫にも本文以上の解釈をしているものが見受けられ、富樫は一行を本物の山伏だと思ひ込み、だまされた形で関を通したとしているものもある。

しかし、「安宅」の中心はあくまで弁慶であり、「安宅」の物語は「富樫が関を通す」物語なのではなく、「弁慶たち義経一行が関を通す」物語なのである。だからこそ能の見せ場である舞の場面は関を通つた後の酒宴の場であるし、視点もほぼ義経一行側からのものなのである。富樫はあくまで能の役割としては物語の進行役であるワキなのであるが、その物語の進行にあたって、富樫には北国落ちに伝説に欠かせない難題譚の象徴が全て凝縮されている。北国落ちにおいて、随所随所に散りばめられていた面白要素（＝難題）が、能楽になるにあたって、ワキである富樫に必然的に詰めこまれる形となり、奇しくも富樫は「安宅」の中でワキでありながら抜群の存在感を示している。それにもかかわらず、富樫はワキであるため、難題譚の象徴でありながら、その人物に関する詳細はことごとく省か

れている。「安宅」の中で、こうした人物に作り上げられた富樫は、近世以降、様々な分野で語られた〈安宅物〉において、物語を膨らませるには格好の素材となつたのであろう。物語を膨らませるならば、主役に立ちふさがる困難の方を膨らませた方が面白味は増すし、その困難がどのように取り払われるのかはまさしく物語の見せ場である。義経一行が関を通る場面はその見せ場に当たり、富樫が関を通す際に様々な理由や事情が付け加えられたのは、こうした理由があつたためではないかと考える。そして、富樫像の魅力は「情けの人」であることではなく、どこまでも物語を膨らませられる、難題譚の象徴であつたことにあるのではないかと考える。

おわりに

実際の本文では、せいぜい義経を氣遣う程度の台詞しか見られない富樫が、多様な富樫像を生み出し、最終的に「情けの人」というイメージを確立させ、題材を同じくする「勸進帳」の富樫にもそのようなイメージを抱かせることになつたのは、「安宅」で示される富樫が難題譚の象徴でありながら、詳しいことは分からない人物であつたからに他ならない。これほどの多様な文学作品を生み出し、今日も安宅伝説を支え、敵役から英雄へと支持されていた、その様々な解釈を生み出す可能性を持っていたということが富樫像の文学的価値であり、魅力なのではないかと考える。

注

- (1) 梶原正昭校註・訳『新編日本古典文学全集 62 義経記』(平成12年 小学館)
- (2) 横道萬里雄 表章校註『日本古典文学大系 41 謡曲集下』(昭和42年 岩波書店)
- (3) 鳴和滝についての解釈を詳しく紹介したものに西村聡氏の「近代〈安宅〉論議と地域伝承史―「鳴るは滝」名所化への視線―」(金沢大学文学部論集 言語・文学篇 第26号 平成18年)がある。
- (4) 藝能史研究会編『日本庶民文化史料集成 第三巻 能』(昭和53年 三一書房)
- (5) 石川県立図書館蔵『盛長私記』
- (6) 大井貞恕『謡曲拾葉抄 日本文学古註釈大成』(昭和54年 誠進社)
- (7) 日本随筆大成刊行会編『日本随筆大成 (第二期) 18』(昭和49年 吉川弘文館)
- (8) 金沢古典文学研究会編『金沢市立図書館蔵 謡言粗志―翻刻と校異―』(平成元年 金沢市教育委員会、金沢古典文学研究会編集 金沢市発行)
- (9) 島津久基『義経傳説と文學』(昭和10年 明治書院)
- (10) 麻原美子 北原保雄校註『新日本古典文学大系 59 舞の本』(平成6年 岩波書店)
- (11) 尾形仿 井川昌文(「翻刻」中尊寺蔵「義経北国落絵巻」)(東京教育大学国語国文学会編『国文学言語と文芸 第64号』昭和44年 大修館書店)
- (12) これらの作品の本文は、以下の書籍に拠った。
「義経東下り物語」：大谷大学国文学研究室編『よしつねあづまくだり物語』(昭和51年大谷大学国文学研究室編)
「凱陣八島」：饗庭篁村校訂「近松全集 近松時代浄瑠璃全」(明治29年 博文館) ※作者については争いがあるが、今回はこちらのテキストを参照した。
「穽静胎内拮」：新修小松市史編集委員会編『新修 小松市史資料編 7 文芸』(平成20年)
「義経風流鑑」：八文字屋本研究会代表長谷川強編『八文字屋本全集第五巻』(平成6年 汲古書院)
「花実義経記」：八文字屋本研究会代表長谷川強編『八文字屋本全集第七巻』(平成6年 汲古書院)
「清和源氏十五段」：鳥越文蔵監修 義太夫節正本刊行会編『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集 清和源氏十五段』(平成18年 玉川大学出版部)
「風流東海観」：八文字屋本研究会代表長谷川強編『八文字屋本全集第十四巻』(平成9年 汲古書院)
「御摂勧進帳」：古井戸秀夫 鳥越文蔵 和田修校註『新日本古典文学大系 96 江戸歌舞伎集』(平成9年11月 岩波書店)
「通増安宅関」：『近代日本文学大系 第十二巻 黄表紙集』(昭和2年 国民圖書株式会社)
- (13) 水島茂「第八編 越中の関所と宿駅」(児玉幸多監修 坂井誠一編『地方史研究叢書 4 近世越中の社会経済構造』所収 昭和

和50年 名著出版)

- (14) 鳥居フミ子「勸進帳劇の形成」(『日本文学』73号 平成2年)
- (15) 飯塚恵理人「幽玄へのいざない十一」《安宅》解釈の変遷―富樫はなぜ義経一行を通したのか(『紫明』28号、平成23年)
- (16) 今尾哲也「伝承の崩壊―富樫の名乗りぜりふを中心に―」(『テアトロ』517号 昭和61年 テアトロ社)
- (17) 高桑いづみ「第三回 能『安宅』(二)」(『日本の伝統芸能』平成10年 日本放送協会)
- (18) <http://www.komatsuguide.jp/>「まるごと・つまみ・旅ナビ」平成27年1月10日閲覧